2025年7月

第178号

ぱれっと

㈱北日本ベストサポート
℡ 018-883-1888

「令和の米騒動」

2024年(令和6年)から翌2025年(令和7年)にかけて、各地で米の買い占めと品薄が発生し、米の価格が全国的に高騰し市場が混乱した。これを令和の米騒動と言われるようになった。

長年、下落傾向にあった米の消費が2021年661万トンを底に上昇に転じ2023年度の需要が705万トンに達した。しかし、2023年は猛暑と水不足の影響で作況指数が悪化した。また、産地では農家から直接米を購入するブローカー的業者の参入が相次ぎ、農協の集荷率も20%台に低下した。そのため、2024年初頭の米価格は約300円/Kgだったが2025年5月には800円/Kgまで2.5倍以上に高騰した。

これまでの日本の農業は、機械化による生産量増加、大規模農業への転換などを目指してきたが、一方で食文化の欧米化で「コメ離れ」が加速し統計的に生産量が消費量を上回る状況が続いたため米作農家に作付面積の削減に金銭を支給する、いわゆる「減反政策」が取られるようになった。

日本の米消費量はピークの昭和40年(1965年)頃と比較すると2023年の「1人当たりの年間米消費量」は約半分の50.9Kg(1人/年間)までに減少している。

そもそも、減反政策はアメリカが戦後、日本戦略として米国の過剰農産物の小麦を処理するため、日本に関税を撤廃させ、小麦を輸入させ米を余らせることで日本が減反政策を行うよう仕向けた経緯がある。

農作物は生産と価格の調整が難しい面がある。例えば、平成15年時米の生産量が10%減少しただけで、米価が30%も上昇し、平成16年時は生産量が9%増加し生産過剰となっただけで米価が25%も暴落した。

今回の米騒動に対して江藤拓前農水相は緊急事態に備えで貯蔵されている備蓄米を3回に渡って競争入札の形で放出したが、その95%はJA全農(全国農業協同組合連合会)が落札した。しかし、店頭に並ぶまでに想定以上の時間がかかったほか市場に出回った備蓄米も極小量にとどまりその効果は極めて乏しいものでしかなかった。店頭までに時間がかかった要因は、精米の時間、運送の手配、第5次問屋までの流通経路などの要因を上げているが、新米が出回る直前が一番小売店でも米の需要が見込まれるので急いで出荷しなかったのではないかとの憶測も流れている。江藤大臣の失言で小泉新農水相となりこれまでの競争入札から随意契約に切り替え大型小売店に直接備蓄米(古々米、古々々米など)を売却し狂乱価格を押さえ込もうとしているが、あくまでも緊急措置としての対策であり、長期的に米問屋の流通経路、備蓄米保管のあり方、米作農家・消費者が納得のゆく農業政策を示してほしい。

「中小企業に学ぶ」

元慶應義塾大学 名誉教授　村田　昭治

いい仕事をしている会社の特徴

中堅・中小企業のなかに、目立たないが、いい仕事をしている会社がたくさんある。

トップマネジメント、リーダーが、そして仲間たちが活き活きとしている。

それらの会社には共通した特徴がみられる。

一つめは、会社の理念、夢、目標を明確に示している。そのナビゲーションが、社員に自信をもたせ、安心させ、自分がどう貢献したらいいのかを自覚させている。

二つめは、経営者、リーダーが人を看る目を持っている。自分だけでなく相手もこちらを看ている。だから、どれだけ親しく心を通じ合っているかが大事になる。

三つめは、適材を適所に配置している。

四つめは、経営者、リーダーが、課題の優先順位をきちっとつけている。企業によっては、社長、副社長、専務の考える優先順位がちがっていて、舵取りの乱れが社内の障害になっている例があるが、それがない。

五つめは、社員のモチベーション、未来に対する使命感を高め、維持するために、勉強会や討議、座談会をつねに行っている。

そして、六つ目は、お客様の心の中に入っていって、自分の会社を選んでいただく、感動・共感の心配り、対応をしている。

人の値打ち　会社の価値（抜粋）

真摯に仕事と対決し、人間愛のある会社の人達と接するとき、わたしは福田恆存先生の言葉を想起する。「一人でもいい、他人を幸福にし得ない人間が、自分を幸福にし得るはずがない」また自由について教養について、「人間の値打ちは地位や財産によって決まるのではない、人格、心格、知的生産能力で決まる。」

中小企業はきびしい。しかし、それゆえに案外、これからおもしろくなってくる会社が増えるのではあるまいか。日々、切磋琢磨を怠らず、おごらず、工夫に頭をしぼり、製造コストを１円下げるため、みんなの知恵を結集しているからだ。びっくりするような会社が確実に生まれていく予感が、私の心に湧いている。

【人を惹きつける経営　より】

アーネスト・ヘミングウェイ（米国出身の小説家・詩人）

1899 年 7 月 21 日	米国シカゴ生まれ。父・クラレンスは医師。母グレイスは元声楽家。
1913 年	オークパーク・ハイスクールに入学。
1916 年	初の短編小説「マニトウの裁判」を学校の雑誌「タビュラ」に発表した。
1917 年 10 月	地方紙「カンザスシティ・スター」の見習い記者となる。 翌年、赤十字の一員として第一次世界大戦で北イタリアの戦線に赴き負傷兵を助けようとして自らも瀕死の重傷を負う。 戦後、カナダ・トロントで「トロント・スター」紙のフリー記者をつとめ、特派委員としてパリに渡りガートルード・スタインらとの知遇を得て小説を書き始めた。
1930 年代	国際旅団へ参加、スペイン内戦に関わり、その経験を、「武器よさらば」「誰がために鐘は鳴る」などハリウッドの映画化の素材を提供した。
1954 年	「老人と海」が大きく評価され、ノーベル文学賞を受賞。 同年、二度の航空機事故に遭遇、奇跡的に生還したが、事故の後遺症による躁鬱など精神的病気に悩まされる。
1961 年 7 月 2 日	散弾銃による自殺を遂げた。　享年 61 歳。

オススメの *BOOK*

「父からの手紙」

作者　小杉　健治　　発行者　光文社文庫

作者は、1947 年東京生まれ。83 年「原島弁護士の処置」でオール讀物推理小説新人賞を受賞しデビュー。88 年「絆」で日本推理作家協会賞、90 年「土俵を走る殺意」で吉川英治文学新人賞を受賞している。

本書は、作者が最も力を注いでいると言われる「親と子の絆」が根底に有る。しかし、父は二人の子供を残して失踪した。その後、残された子供に対しては毎年、誕生日に決まって子供の幸せを願う「手紙」が届いた。

子供たちは毎年異なる手紙の切手スタンプから、微かな手がかりを追い求めて探索する。そこには驚くべき真実が隠されていた。

くらしと保険のおはなし

日常から備える

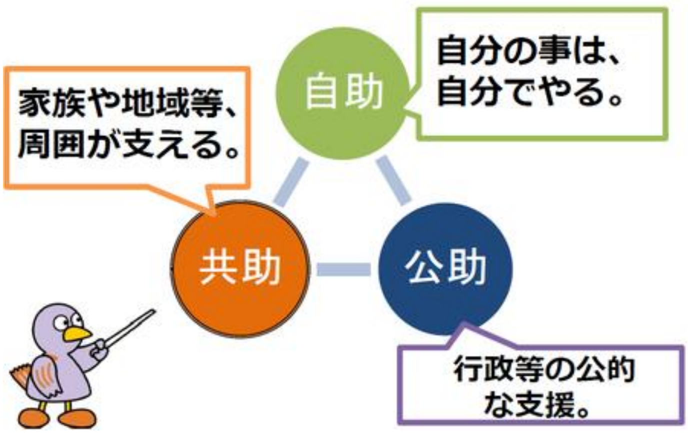
今年は阪神・淡路大震災から三十年の節目を迎え、能登半島地震から一年半が経過しました。いずれも年始一月の災害として記憶している人も多いでしょう。

近年では、全国で大小の地震が頻発し、異常気象とも言える局地的な大雨や大雪の災害も増加傾向にあり、生活に影響を及ぼしています。

内閣府の「防災に関する世論調査」によると、対応を家族と話し合っているが約六割、備蓄など物の備えをしているは約五割、避難場所など行動の備えにおいては約三割強の人が実施しているという結果が出ています。

防災には「自助」「共助」「公助」があります。「自助」は有事の際だけではなく、事前の物や行動の備えを整え、定期的に確認を行う。「共助」は大変な時だけ求めるのではなく、日ごろから良い関係を築くことも大切です。

自然災害の予知は、現在の科学技術でも、その正確性は不透明と言われています。そのため、公助の整備も求められますが、日ごろから有事のことを考え、共助の精神と自助の意識をもって行動していきたいものです。　【職場の教養】



また、災害時は、偽情報や誤情報に注意が必要です。政府や自治体のホームページまたはSNS・新聞・テレビ・ラジオなどの情報を利用しましょう。災害時に役立つ政府の公式ウェブサイトなど防災関連ウェブサイトを日ごろから意識し、いざという時に最新情報を得られるよう備えておくことも必要ではないでしょうか。

【編集後記】

なんとなく、世の中が騒々しい。ロシア・ウクライナ戦争を自分が大統領になれば 1 週間で終結させてみせると豪語していたトランプ大統領。

世界貿易に対して米国第一主義を前面に出し、各国との貿易収支の赤字を解消しようとする姿勢を崩さず、日本との交渉も予断を許さない状況になっている。

また、核廃絶を協議していたイランに突如として武力による攻撃を加え混乱が拡大している。 G7 の会議でも 1 日だけ参加し帰国してしまった。

国内では、「米騒動」。どれもこれも、早急に沈静化して欲しい。